ネットワーク革命と言語処理

最近，現在の言語処理でホットな話題は何かと聞かれると返答に困ることが多くなった．第 2 回の年次大会のプログラムを見ると，コーパスに関連した発表が多く，これがホットな話題には違いない．しかし，言語処理に少し興味を持っている，言語処理の研究成果を応用したい，といった人からの質問への解答としては，パッとしない気がする．ホットな話題がない原因は，技術的な壁と共通アプリケーションの不在ではないだろうか．

技術的な点で，確かに日本語形態素解析は，実用レベルになっており，構文解析のアルゴリズムも安定したものになった．特に奈良先端大の松本裕治先生などの努力により，JUMAN や SAX といったツールが容易に利用できるようになったことは，昔のことを思えば，大きな進歩である．しかし，これらに匹敵する安定した文法が容易に入手できるかといえばそうではなく，文脈や意味に関しては依然，研究段階である．また，研究者が共通に興味を持つアプリケーションに関しては，従来からの自然言語インタフェースや機械翻訳以外，目ぼしいものがない．

94 年 3 月 30 日に，言語処理学会の設立総会に先立って，「自然言語処理の技術動向」調査報告会で「自然言語処理技術のこれからの課題」の一部を報告させていただいた．その際の個人的感想としては，近い将来に実現できるビジネス・アプリケーションは少なく，ホームユースのアプリケーションは考えられない，というものだった．一般家庭の人が機械翻訳システムを利用して外国から通信販売で商品を購入するようになるとは思えなかった．確かに 94 年 3 月の時点で WWW は存在したが，調査報告書に掲載するほどは注目していなかった．

しかし，昨年からのインターネット・ブームである．インターネット・カフェは当然になり，インターネット居酒屋やサウナまで登場しているとのこと．500 ドル・パソコンは，家庭への進出をねらっている．先日，東京のホテルで朝食を取っていると，横の席のビジネスマンが，ネットワーク・プロバイダの設立の可能性を雑談していた．5 年後にどのようになっているかは想像もできないが，この 1–2 年の間は，一般家庭から外国の通信販売を利用するのも珍しくないことになるであろう．また，携帯電話や PHS もブームになっており，インタフェースが音声のみの環境が一般化しつつある．音声認識・合成もホームユースのニーズが登場しつつある．

このように，機械翻訳や情報検索，音声認識・合成と自然言語インタフェースといった，アプリケーションが，ビジネスユースではなく，ホームユースで登場しつつある．すでに，WWW のナビゲータに機械翻訳を付加することは広く行われている．あたりまえではあるが，ビジネスユースとホームユースでは，必要とされる性能と許容される価格とが大きく異なる．言語処理に関する古いアイデアを実用化し，新しいアイデアを提案するチャンスではないだろうか．

中村順一
九州工業大学